

教師の協働化による、生徒が支え合い高め合える関係の構築 - 「傾聴」を基本とした規律の確立と「表現力」の育成を通して -

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
土岐 浩司

実習責任教員 芝山 明義
実習指導教員 小坂 浩嗣

キーワード：協働，傾聴，表現力，校内研修

I 課題設定の理由

本実践研究を行うにあたり、実習校の現状を把握するため、実習校で年に2回実施されている学校評価アンケート、実習生による生徒・教職員へのインタビュー等によるアセスメントを行い、そこから見えてきた実習校の課題を踏まえ、テーマを設定した。

1 実習校の状況

実習校は平成28年5月1日現在、学級数17（うち特別支援学級2）、生徒数約480名、教職員数44名（うち支援員等10名）の中規模校である。平成27年4月より隣の中学校と統合し新しい中学校としてスタートした。統合については、元々それぞれの学校文化をもっていた二つの中学校が同じ学校の生徒として統一感をもつことが難しい状況にある。

2 実習校の課題

アセスメントにより、実習校の生徒は学校や学級への所属感が希薄で表現することに抵抗感があること、また教職員は指導の個業化が課題である。生徒には特に表現力を発揮する機会が十分に取れていないことも注目される。

3 先行研究・事例の検討

教職大学院の平成27年度「子ども理解に基づく学級経営の実践と課題」の講義において、「人のことを大切に聞く」という指導が生徒の自己成長を促し、人や社会とかわる力をつけるということを学んだ。また、「教育相談の技法

と実践」の講義では、クライアントの言葉の向こう側に耳を傾け、心を傾ける姿が、「聞く」ではなく「掬（きく）」なのだと理解した。これらの学びから、生徒を叱咤しきちんと「聞かせる」指導ができるだけでなく、生徒の思いを汲み取り寄り添うことのできる教師が本当の意味で「傾聴」できる教師であると考えに至った。

また、筆者の前任校では校内研修テーマを「言語活動の充実」に定め、全校生・全教職員で「短歌・俳句・川柳づくり」に取り組んだ。これにより、生徒の言葉の選び方が上達し、表現にも工夫が見られるようになった。また、創作にとどまらず、作品を通して同学年の生徒や教師との交流場面を設けたことで、共感したり自分には気付かなかったことを見つけたりできるようになっていった。これは言語環境を整備したことにより「表現力」が向上した事例である。

4 実践の目的

平成27年度の実習校の課題として、全体的に落ち着きがなく授業中の私語や立ち歩きが収まらないことがあった。教職員もその事態への対応に奔走し、生徒が授業を集中して聞くという体制が整っていなかった。そこでまずは「傾聴」を基本とした授業規律の確立を目指すこととした。実習校の校訓：「『聴』『敬』『動』」でも一番目に掲げられているように、「傾聴」の姿勢を浸透させていくことは全校を挙げて取り組むべき課題である。

また、所属感に乏しい生徒の内面の醸成を図るために、「表現力」を育成し、自分の言葉で語れる環境を整え技能を向上させることとした。自分たちの思いを互いに自分の言葉で語れ、それらを共感し合えたときになかまととしての意識も芽生える。それに対して教職員も共感的に受け止め、適切な評価を返していくことで生徒同士がつながり、生徒と教師がつながる。さらに、教師同士も生徒の言葉を通じてつながっていき、教師・生徒が双方向で刺激し合っていくことで、同じ中学校のなかまとして共に高め合える、真の意味で統合された学校となっていくと考える。

II 実践計画と実施過程

実践計画は表1のとおりである。

表1 実践計画

準備期	2・3月	学校課題共有に向けた教職員ワークショップ 学校課題分析と提示
第I期	4月	全校生に俳句オリエンテーション授業 生徒会ワークショップ
	5月	校内研修体制の見直し 創作タイム実施に向けた環境整備
	6月	第1回創作タイムの実施 聞き方コンテストの実施
第II期	9月	音楽科授業参観、各クラスの自由曲・課題曲分析 若年研修の実施
	10月	合唱コンクールに向けた指導支援 第3回創作タイムの実施
	11月	実践内容の振り返り 今後の校内研修の企画

1 準備期

アセスメント結果を全教職員に報告し、教職員の認識と大きな乖離がないかどうか確認を取った。その上で、全教職員が一つのテーマで情報を共有することを第一の目的として、生徒のよさと課題を見つめ直すワークショップ型研修

を行った。その際、日常的に同じ学年団以外の教職員と話したり生徒の姿を学校全体として捉えたりする機会は少ないことから、全体を学年団混合の4つのグループに分けるよう配慮した。

2 第I期

1) 校内研修体制の見直し

教職員が意識を共有し、協働の体制をつくっていくために校内研修の充実は不可欠である。しかし統合により、校内研修の体制が十分に機能する形ではなかったため、研究主任と、聞く力・話す力の育成を基盤とした「学力向上」と「表現力の育成」という二つの柱を課題とし、どうアプローチしていくかを話し合った結果、研究テーマは「主体的に自らの学びを広げ、深めることのできる生徒の育成」に決定した。さらに、この目標の実現に向けて「学力向上部会」「学びのサイクル向上推進部会」の二つの部会を設置し機能させていくことも決まった。

2) 生徒会役員との連携

生徒同士で声を掛け合い、その言葉を真摯に受け止めて向上していくには生徒会のもつ役割は大きいと考え、生徒会役員と連携を図った。事前アンケートによりまとめていた「卒業生の考える実習校生徒のよさと課題」について生徒会役員に提示したところ、自分たちでも分析をしたいという要望が出てきたためワークショップを行った。でき上がった二つのシートをもとに、全体で「生徒会としてできそうな取り組み」を話し合った。そこで大きく話題に上った「授業中の私語や教師によって変わってしまう態度」の問題に対して有効な手立てを模索する中、「聞き方コンテスト」クラスマッチを全校展開で行うことが提案され、生徒会主導で実施した結果、各学年の聞き方に関する傾向や生徒同士で声を掛け合うことの効果などが明確に示された。

3) 「表現力」の育成

年度当初の職員会で学校努力目標・努力事項における言語環境整備の一環として「短歌・俳句づくりの推奨」が挙げられたことにより、教職員も作品を創作することは支障なく進められた。生徒が作品を作るにあたり、まず俳句に関するオリエンテーション授業を行い、俳句の知識を得ると同時に関心を高められるよう配慮・工夫した。全校での「短歌・俳句・川柳づくり」を「創作タイム」と仮称し、第1回のテーマ:「運動会」として実施した(6月)。教職員・生徒共に自身の体験や思いを言葉に込め、自分らしい表現で作品をつくることができた。それに伴い、選句の際の鑑賞文では作者の感動を共感している姿も多く見られた。選句の結果決まった各学年5つの優秀作品については生徒玄関に掲示し、次回「創作タイム」への意欲づけとした。

4) 研修だより

上記のような取り組みの詳細やその意図を教職員全体に周知するため、月1回程度「研修だより」を発行した。教職員や生徒会役員のワークショップ結果分析や聞き方コンテストの進捗状況、俳句作り方講座など、教職員の情報の共有や実践の理解にとって有用な内容とした。また毎回感想を書いてもらい、次回に盛り込む内容を検討するようにした。「研修だより」の発行は、第Ⅱ期についても継続した。

3 第Ⅱ期

1) 若年研修

実習校では毎年10月末に合唱コンクールを行っているが、若年教員の一人からこのような行事で他の教師がどのように工夫して取り組んできたのかを知りたいという要望があった。その要望に沿う形として若年研修を企画し、「学級経営の視点からの合唱コンクール指導」という

テーマでプレゼンテーション及び討議を行った。当初は若年教員のみで行う予定であったが事前の職員会で声掛けしたところ該当しない教員の参加もあり、積極的に学ぼうとする姿勢が見られた。研修後に実施した若年教員対象のアンケート内容や事後の若年教員との会話から、この研修が教師と生徒の信頼関係に基づいてお互いに「傾聴」し合う大切さに気付く一助となったことが認められた。

2) 合唱コンクールに向けての指導支援

前述の若年研修の様子を研修だよりで周知したところ、自分の学級にも合唱指導に来て欲しいという要望が出てきたため、学級練習や放課後練習に参加しながら学級担任の補佐を行った。まず、学級の状態を知るため音楽科の授業参観を行い、そこで実習生の見取った課題とよさを学級担任に伝え、どのようにアプローチしていくのかを相談していった。その後、実際に実習生も学級での練習に参加して、パートリーダーや指揮者に指導内容を伝達し、生徒自身が学級全体に周知する形をとるようにした。これにより、生徒同士で声を掛け合う場面も増え、課題意識を明確にもって行事に取り組めたと思われる。

3) 「表現力」の育成

10月に行った「創作タイム」が3回目となるため生徒は俳句や短歌を作ることに大きな抵抗なくできるようになってきた。それまでは国語科を中心として創作活動に関わってきたが、これ以後、学級単位で実施していく形に転換した。創作に関して生徒に任される部分が増えるため、より自覚をもって自身の作品と向き合えたと思われる。また、教職員の意識や態度も、短歌・俳句に関しては国語科に任せるといった捉え方ではなく、他教科が専門であってもで

きることには能動的に取り組み、この行事を盛り上げていこうという姿勢に変容しつつある。

Ⅲ 実践研究の成果と課題

1 実践研究の成果

実習年度当初のワークショップ型研修により、教職員は自身の所属する学年団等と関係なく、自校の生徒について見つめ直すことができた。

校内研修に関しては、新設した2つの部会いづれかに全教職員が所属する形にしたことで、自覚と責任をもって研修に参加する体制ができた。また、各部会の話し合いでもテーマに沿って、活発に意見を交わし合う姿が見られた。

生徒会の果たす役割については、より裾野を広げつつある。年度当初から生徒会役員は意欲的に行事等を成功させようと企画・運営していたが、全校生徒にどのように働きかけていくかは曖昧な状態であった。しかし、生徒会ワークショップ、「聞き方コンテスト」と進めていく中で、全校規模で自校生徒のことを考える機会ができ、全校生徒が意識のベクトルをそろえることに重きを置いて動けるようになっていく。

「創作タイム」は表現力を発揮できる学校行事の一つとして生徒にも教職員にも定着してきている。生徒には鑑賞文などを通して、文章力だけでなく自分の思いを素直に表現できる感性が徐々に育ってきている。さらに、教職員が生徒と同じ土俵で創作・選句し合うことが刺激となり、共に競い合ったり思いを共有し合ったりできていることも大きな収穫である。

2 実践研究の課題

校内研修のシステム化は進んだが、一部の教職員に負担がかかっているという問題点は解消されていない。部会内で役割を細分化して負担を平準化すると共に、教職員全体の意識をより向上させることも検討しなければならない。

「創作タイム」に関しても、この活動を進める際に生じる負担を教員間で広く分担すると共に、生徒が自分の学校の行事であるとの自覚をもって取り組むためには、生徒に任せる部分を増やすことも必要である。

Ⅳ 今後の課題と構想

昨年度まで多くあった生徒指導上の問題行動は今年に入って大幅に減少している。教師と生徒、生徒同士、そして教師同士でもお互いの声を聴き合い、分からないことは訊き合い、相手の想いを察し掬（きく）ことができるようになり信頼関係が少しずつ構築されてきた証でもある。このような時こそ校内研修等を通して教師が自ら学ぶ姿勢をもつことが豊かな学校文化の土壌をつくっていくと考える。学校現場のニーズに沿い、全教職員が思いを一つにして研修に邁進できる体制を確立できるよう支援したい。

Ⅴ 今後の展望

実践研究を通して、人に動いてもらうには多大な時間と労力がかかるということがよく理解できた。それと同時に人が動くには心を動かす言葉が大切であるということも痛切に感じた。生徒の声に真摯に耳を傾け心に響く言葉で返していくことはもちろんのこと、同僚教師についてもお互い納得し合意形成がなされた上で様々な活動に一丸となって取り組めるような言葉を自己研鑽しながら蓄えていきたい。そして、ベテラン教員と若年教員の橋渡しが円滑にできるミドルリーダーとして成長していきたい。

教職大学院の講義の中で聞いた「教育をあきらめない、子どもをあきらめない、実践をあきらめない」という言葉は強く自分の心に残っている。全ての教職員がこのような姿勢を継続してもつことのできるサイクルを学校内に構築できるよう、学び続ける教師の一人でありたい。